歴史地震
第31号 (2016) 179頁

[講演要旨]1586 年天正地震における伊勢湾沿岸地域の被害について

東北大学大学院文学研究科　　松岡 祐也

§1. はじめに

天正十三年十一月二十九日(1586.1.18)に発生した，いわゆる「天正地震」は，近年盛んに研究が進められている．特に注目されているのは，震源断層と，若狭湾の津波の有無についてである．一方で，伊勢湾沿岸での被害状況に関する研究は，比較的少ない状況にあるといえる．

天正地震に関する先駆的研究として，飯田汲事による一連のものがある(例えば，飯田1987)．その中で飯田は，伊勢湾内での津波被害についても言及しているが，これについては松岡ほか 2015 が検討し，伊勢湾内では津波が発生していないだろうと結論づけている．このように，天正地震についての飯田の成果に対しては，見直しが必要であると考える．

今回は，伊勢湾沿岸地域，とりわけ湾奥での地震被害について，史料の再解釈による検討を試みようと思う．

§2. 長島の被害状況

伊勢湾沿岸での被害地として特に注目されてきたのは，長島(三重県桑名市)であった．当時の長島は木曽川河口のいくつかの島で構成されていたが，これらの島々が地震によって海没したとする伝承も，注目されてきた理由の一つであろう．

ここに存在した長島城は，尾張と北伊勢を領有する織田信雄が居城としていた．この長島城の被害は様々な史料に記述が残されている．例えば羽柴秀吉朱印状写には天守以下の建物が焼失したとあり，また他の史料にも「顛倒」や「大破壊」といった語が見えることから，城および所在する島の被害は相当大きかったことがうかがえる．

長島の被害については，『長島細布』が詳しく記している．この史料は地震後 150 年ほど経過して書かれたものであるが，長島城同様，いくつかの寺社が顛倒・破壊したという記述の他，新田の液状化などといった被害があったとする．海没伝承の実否はともかく，長島の被害規模は，後々まで語り継がれるほどの大きさだったのだと考えられる．

§3. 津島の被害状況

伊勢湾と天王川を通じて結ばれていた津島(愛知県津島市)は，初期織田政権の経済基盤となったほど繁栄した都市であった．そのような湊町の被害は，伊勢湾沿岸の地震被害を考える上で無視することができないだろう．

天正二十年の田中次郎衛門黒印状には，95 町ほどの土地が「ゆりこミ」のために荒れ地となっていると記されている．これは，天正地震による陥没を指すと考えられ，津島周辺での地震被害を示すものである．また『張州府志』には，津島に所在した興禅寺が地震によって被災し「諸堂敗没」となったと記されている．このような建物被害も津島では見られたようである．

文禄二年(1593)には，豊臣秀吉によって，津島復興のために 5 年間の諸役免除が命じられるなどの諸政策が行われたものの，地震復興は進まず，湊町・津島は衰微していったと考えられる．

§4. その他の被害状況

このほか，伊勢湾奥の被害として，飯田 1987 は桑名城(三重県桑名市)の本丸や多門櫓などが倒壊したことを紹介している．しかし，これは『長島細布』では長島城の被害と記述されており，ここから飯田 1987 は誤っていたことが分かる．

また湾奥ではないものの，近年，松ヶ島(三重県松阪市)の地震被災の可能性への言及も見られる．これは史料記述などによるものではなく，松ヶ島城主・蒲生氏郷が地震の 2 年後に松坂城へ居城を移転している理由を天正地震に求めたというものである．

桑名・松ヶ島ともに直接被害について記す史料はなく，周辺状況から被害規模を推定するしかないわけだが，沿岸の都市であることから，何らかの被害が生じていた可能性はあっただろうと思われる．

§5. おわりに

天正地震による伊勢湾奥の被害状況を見てきたが，液状化や陥没といった地盤変動に伴う被害が大きかったことが分かった．また，それらの被害が居城移転や都市衰退の原因となり，天正地震が政治的・経済的に影響している姿が見えた．

松ヶ島での被災の可能性が言及されているが，今後は検討の範囲を伊勢湾沿岸のより広い地域に広げ，被害のもたらした影響をさらに検討したいと思う．

文 献

松岡祐也・都司嘉宣・今村文彦，2015，1586 年天正地震における伊勢湾沿岸の津波の再検討，津波工学研究報告，32，251-257p

飯田汲事，1987，天正大地震誌,名古屋大学出版会，552pp.